気持は急いでいる

もうひとつは、僕がいるから僕の方を見た。
僕の急行に時間を合わせて来た。
こちらの話もうますぎる。
頭の中ではいろんな事考えられるが、
実際は僕はすましてバス停で
僕は無言で突っ立っているだけ。
時々、あの子に視線を向けるのが
それが、僕の今の勇気の限界か。
ああ、悲しや、情けなや。
そう思いつつ、朝の出会いは一瞬で終わる。
別々にバスに乗り、別々の学校へ向かう毎日だ。

教室で加地と将棋の続きを
授業終わったあともやり、
昼食に遅れる。
後、五分で、中庭で整列という時、
加地と食堂に走り、
僕はビフカツを取る。
「さあ、食べよう。」とすると、
奥田が、もう呼び笛を鳴らした。
教室に入る前の整列入場の為の集合の合図だ。